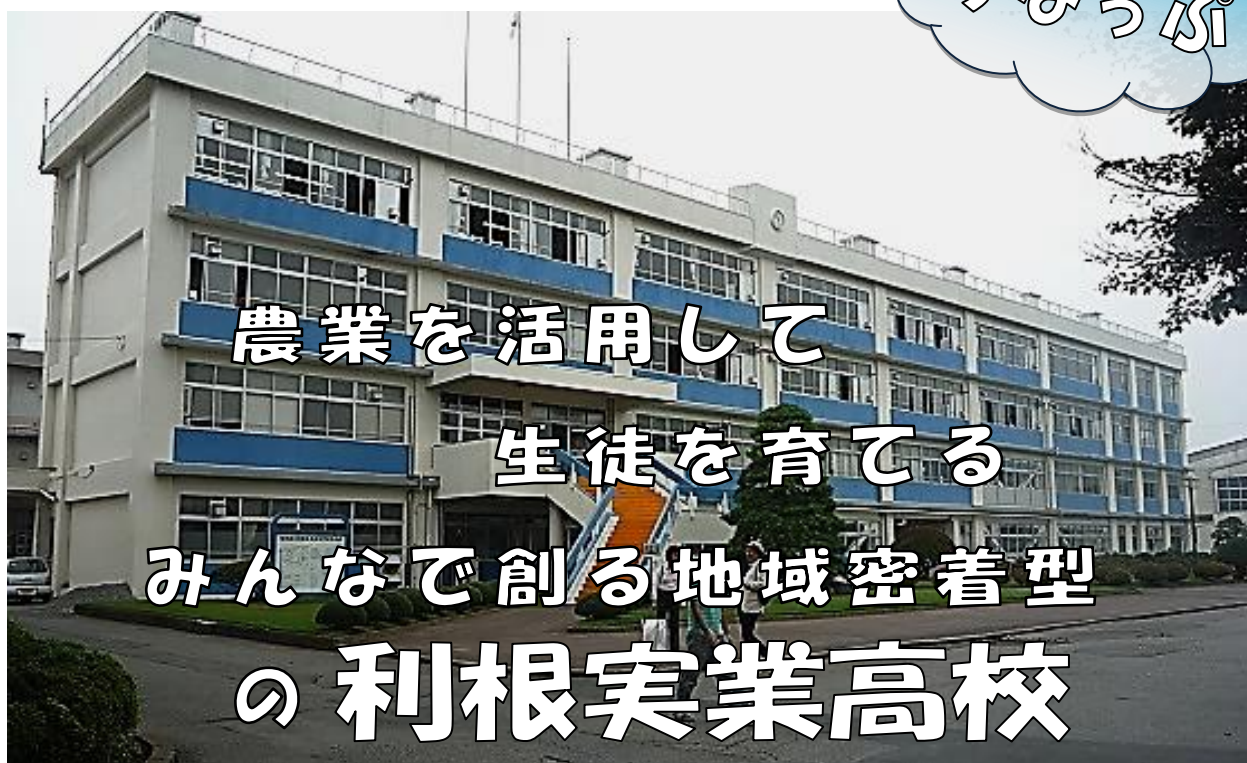


さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ



10月3日、私たち取材班は、沼田市にある利根実業高校に向かいました。例年なら気持ちのいい秋晴れのシーズンですが、台風の影響で雨にならないか心配です。

利根実業高校の門に入ろうとすると、まず目に飛び込んできたのが「全国高校生そば打ち選手権大会優勝」の看板と校門に掲示されたスローガンの中の「みんなで創る地域密着型の利根実業」、そして校舎前には「ユネスコスクール」の看板。ユニークな農業高校の教育活動の一端がうかがわれ、わくわくしてきました。玄関から校長室に向かう校舎の壁はウッディなログハウス風、そして校長室も木目を生かした落ち着いた部屋で素敵です。校舎改築の際、こだわって設計されたとのことでした。



横手静夫校長先生に お話を伺いました

利根実業高校は農業系 80 名、工業系 80 名の定員ですが、学年別くくり募集というシステムで、2～3年になると希望を生かして、生物生産科（生物資源コース・食品文化コース）、グリーンライフ科（森林科学コース・生活環境コース）と機械システム科（機械コース・メカトロコース）、環境技術科（建設コース・加工技術コース）に進級します。

各コース 及び 各学科		
1年次<<募集>>	2年次から コース別	
農業系 (80名)	生物資源コース	生物生産科
	食品文化コース	グリーンライフ科
	森林科学コース	
	生活環境コース	
工業系 (80名)	機械コース	機械システム科
	メカトロコース	
	建設コース	環境技術科
	加工技術コース	

地域に根ざした専門高校

校長先生のお話で印象的だったのが、教育目標にあげられている「地域に根ざした特色ある専門高校の創造」ということです。生徒の95%が利根沼田地域の出身で、卒業後は、利根沼田や県内で働いて活躍している生徒が多いのです。校長先生が嬉しそうに生徒と地域の結びつきのエピソードを語って下さいました。市民の要請で食品文化コースの生徒が開発した「えだまメンチ（枝豆メンチ）」がとても好評で、今やイベントや市内のお店で人気のご当地グルメになっていること、今年の

「真田丸」ブームで展示した沼田城の模型、古くなっていたのを市の依頼を受けて建築コースの生徒たちが再建した話など。



「えだまメンチ」沼田市観光課 website から



赤城農場へ

11 時になると生物生産科コース3年生の生徒たちがバスで昭和村の「赤城農場」に向かいました。私たちも農場長の小林勝先生の案内で農場に向かいましたが、昭和村の台地に登っていくと北海道を思わせるような広々とした大地に、日本一の生産高を誇るこんにゃく畑や牧草が広がって気分も広がっていきます。戦争直後入植した人々が雑木林を切り拓き水の無い台地に灌漑用水を引いて苦闘の末、切り拓かれた農地です。

30 分ほどして農場に到着した私たちを迎えてくれたのは、様々な家畜たち。生徒はすでにそれぞれ担当の家畜を世話しています。小林先生の案内で順番に見学して回りました。



賑やかな鶏舎

まずは、鶏舎。賑やかな鳴き声...480 羽の鶏がずらっと並んだケージの中に行儀よく入ってせっせと餌を食べています。餌は効率よ

く流れ作業で送られ、生んだ卵も上手に下の網に滑り降り一か所にまとめて送られる仕組みです。3人の生徒が卵を拾い出して籠に入れて隣の部屋に運び、手際よく洗って10個ずつケースに入れていきます。この卵、市民にも人気でわざわざ買いに来る方もいるそう



です。キャッチフレイズは「卵かけご飯で差が付く利根実の新鮮たまご」、ケースの上にラベルが入っていました。実は私たちもおみやげにいただきましたので、卵かけご飯で食べてみましたが、確かに黄身が盛り上がり味が濃くおいしい！ご馳走さまでした。

生徒に聞きました。「どうして鶏を選んだの？」「一番身近な家畜だから」「かわいいし」「えっ、かわいい？」と思わず聞き返すと「ひよこの時かわいかった」との答え。課題研究

で、ひよこを孵化させて育てたのだそうです。「でも、解体はショックだった。泣いてました。」

卒業後の進路を聞くと、「豆腐屋」「介護」「リハビリ」と明るく答えてくれました。

牛舎にて

ここでは以前は乳牛での酪農もやっていましたが、今は肥育と繁殖をやっているのです、牛舎の中での世話が主な実習になります。入り口のボードに牛の名前、父親・母親の名前、誕生日が書かれていました。「牛の出産にも立ち会うのですか。大変ですね」と言うと、「いやあ、あれはドラマの世界で、実際は知らないうちに自力で生まれるのが普通ですよ」とのこと。50頭の牛がいます。

H28.3.29♀	0347	あいか
H28.5.18♂	0349	長門
H27.12.7♀	0345	じゅんぬ
H28.8.27♂	0355	響紀

牛舎は二つに分かれ、メスの牛は大きな部屋にまとめて入れられているが動き回れます。オス牛は一頭ずつ区画された中に入れられて餌を食べていました。

「肥育ですから、ひたすら食べさせて太らせるのです。」「運動はさせないんですか」「いや、体にいいことはさせないですねえ、人間だったらメタボにするわけです。」と小林先生。

途中で、男女二人の生徒がそれぞれ子牛を引いて牛舎に入ってきました。課題研究で共進会に出すつもりでしたが、メスが生まれなかったのが今年はお出せませんが、牧草地に引いて行って調教しているのだそうです。

<注>共進会とは全国和牛能力共進会といい、いわば牛の品評会で全国大会は4年に一度開催される。高校生の部もある。

「こういう実習で楽しいことは何ですか」「こうやって牛と散歩してる時とかです。」

「良く馴れているみたいだけど」「やっとな、で

もまだなかなか」と言いながらかわいくて仕方ない様子です。気持ちが通じているのでしょうか。「嬉しい時はわかりやすい」「言葉が通じるようになるのかな」「いやー、十年はかかるかな」と生徒は笑っていました。

「どうして牛を選んだの?」「家が農家で牛が好きだから。卒業後は牧場で働きたい。」

「でも大変なことはない?」「やっぱり汚れるし・・・この牛とかは足癖が悪いとたまに蹴られたりするの」。小林先生の話では、牛がパニック時は大変で、以前一頭が暴れだしたら牛舎中の牛が暴れて大騒ぎだったことがあるそうです。牛は(他の動物も、鶏も自由にさせると)序列がはっきりついていて、人間の序列もわかるから、一番上の人じゃないという事を聞かないそうです。



サラブレッドが草をはむ

牛舎の外に出て牧草地に行くと、見るからに毛並みに艶があり姿も立派な馬が草を食べていました。女生徒が手綱を引いて、馬の体をなでています。実はこの馬はもともと競馬馬でした。馬主から預かって世話しているのだそうです。競走馬はまさに走ることを本能として生まれましたからいつか乗ってみたいと思っているそうですが今は赤城農場の生活に慣れることを優先して世話をしています。



「どうして馬係り？」と聞くと、「馬が好きなんです。毎日でも来ていたい。将来は牧場で仕事をしたい。」「他の授業と比べてどうですか」「ゼーンゼーン違って楽しい！自分は最初は普通高校も捜してましたが、自分のやりたいことは何かと考えると、家が農家で土いじってた方が楽しいなあと考えて農業高校にしました」

「大変なことない？」「管理とかは大変ですが…。」

卒業後の進路を聞くと、二人とも農林大学校を希望し、農業のプロを目指します。



羊毛の刈り取りと加工

次に管理事務所の部屋に行くと、3人の女生徒がなにやら作業中でしたが手を動かしながら丁寧に説明してくれました。刈り取った羊の毛を洗剤で洗い、乾かしてほぐして長さをそろえ、着色して成型しキーホルダーのボンボンに加工しているのだそうです。作品はファームフェスティバルで販売もします。課題研究は着色の研究。何を使えばどんな色に染まるか、実験し試行錯誤中です。馬小屋の隣にいた二匹のかわいらしい羊は毛を刈り取られてさっぱりしていました。「羊の毛刈りは大変でした。片手で羊を押さえて片手で刈り



取るんだけど、じっとしててくれないからすごい力があるんです。」

農場実習を支える職員の方々

「昔は当番があったから、生徒も大変でいやがられたもんだよ」とかつての農業高校を知る先生は言います。しかし、今は授業以外や休み中の生徒の飼育当番は殆どないそうです。利根実業高校には農業関係で8名の実習教員と6名の農場代行員がいて、日常的に農地・農場の管理や飼育を担当しています。今日も、目立たないけれど、生徒の活動に気を配ってくれている職員の方々に出会いました。

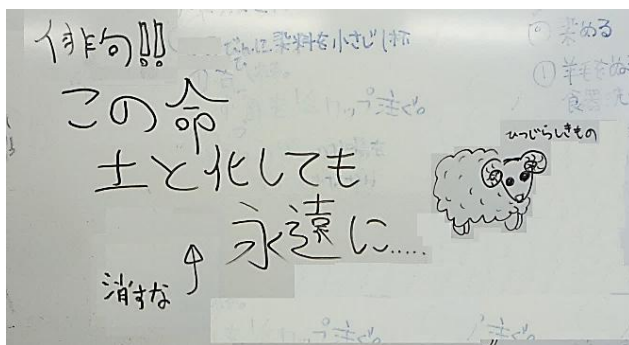
「この命 土と化しても 永遠に」

…命をいただいて

赤城の大自然の中で、家畜と触れ合い世話をする生徒たちはみんな、なんといい表情をしていることでしょう。

ふと気づくと、黒板に俳句が書いてありました。「これ、誰が書いたの？」と聞くと、生徒が笑っています。どうやらA君らしい。「季語がないよー」と茶化しながらも「消すな」と誰かが書き加えています。なるほど、生徒たちが、この生物生産コースの農場実習で一番学んだことは「人間は命をいただいている」ということでしょう。鶏の解体は生徒たちにとってやはり大きな衝撃でもありました。その厳粛な事実と向き合い、命と自然の大切さを体で学ぶ生徒たちがこの利根沼田の地に根を張って活躍する未来を願って、農場を後にしました。

《文責：瀧口典子》



利根実業高校の生物生産科生物資源コースの取り組み

群馬県立利根実業高等学校 教諭 小林 勝

1 本校の沿革

本校は、群馬県北部の沼田市にあります。沼田市は、NHK 大河ドラマ「真田丸」に登場する沼田城址もあり、河岸段丘の街として、地図帳に載るなど全国的にも知られる景観の優美な地域です。

本校は大正8年3月に利根郡立実業学校として開校しました。100年近い歴史を有する伝統校です。

2 本校の教育目標

「地域に根ざした特色ある専門高校の創造」を教育目標に、「正しく、明るく、和やかに」の校訓のもと、生徒と職員がともにステップアップできる、産業社会や地域社会で意欲的に活動できる、誠実で思いやりのある人材の育成を目指しています。

3 ユネスコスクール

本校は、平成26年10月に群馬県の公立高校として初のユネスコスクール加盟校となりました。ユネスコスクールには、以下の4つの基本分野があります。1. ユネスコが行う、貧困・飢餓などへの支援活動を理解する。2. 人種差別問題などへの意識を高める。3. 世界の異文化理解と地域文化の理解を深める。4. 環境問題の検討と解決方法を考える。

本校では、この基本分野を基に、1. 環境教育活動、2. 食育活動、3. 地域ボランティア活動を柱として、教育目標の達成を目指して取り組んでいます。

4 農場部・生物生産科生物資源コースの目標

農場部では、1. 農業や農業関連産業への理解を深めさせる。2. 産業人として大切な人間性を育み、社会の発展を図れる人材を育成する。3. 地域との連携を深め、

地域に根ざした学校づくりを推進する、の3点を目標にしています。

生物生産科生物資源コースでは、野菜・作物・果樹・草花などの栽培方法や家畜等の動物飼育について、新しい技術を取り入れ学習させることを目標にしています。

5 生物生産科生物資源部の取り組み

農業関連学科は、かつては男子生徒が殆どでした。現在は、女子生徒が増加し、本校においては、女子生徒の割合が8割以上になっています。また、農業の担い手として入学してくる生徒も、現在は1割程度になっています。

生物生産科生物資源コースは、昭和から平成にかけて設置されていた農業科を継承するコースです。また、男子生徒が多く、コースの4～5割程度を占めています。

コース生徒は、将来、農業関係の仕事に従事することを目標にしている生徒が多く、3割程度が大学や農林大学校に進学し農業自営や雇用就農を目指して取り組んでいます。全国的に見ても、農業の担い手を多く輩出しているコースでもあります。

昭和時代の農業高校の目的は、「農業を学習し、農業自営者を育てる。」ことが主流でした。しかし、現在の農業高校は、「**農業を活用して生徒を育てる学校**」に変貌しています。そのため、卒業生が将来、「農業への理解者・応援者」となることも重視し、教育活動に取り組んでいます。

生物資源コースは、野菜などの栽培と和牛や養鶏など飼育を柱にカリキュラムが編成されています。利根・沼田地域は、野菜・果樹農家が多い地域です。そのため、農業の担い手の多くは、栽培を中心とした学習に取り組んでいます。一方、飼育については、動物に興味がある生徒が多く女子生徒

が多い傾向にあります。

生物資源コースの生徒は、農業に「やりがい」を強く感じている生徒が多くいます。先生方の指導に対しても耳を傾け、実習にも自ら積極的に取り組んでいます。飼育に関する実習では、和牛や養鶏管理などにおいても、比較的きつい作業であっても熱心に行い、自己の仕事が終われば他の生徒を手伝うなど協働的な活動も見られています。また、夏期の除草作業や糞尿処理作業においても労を惜しまずに作業をこなし、達成感を体感しています。

農業教育の可能性

坂田 尚之

赤城農場で出会った女子生徒に聞いてみました。「3年間どうでしたか？良かった？」の問いかけに「じっとしているより体を動かす方が良い」と微笑みながらうなずきました。その手は楽しそうに羊毛をくしけずっていました。メェ〜と出迎えてくれるヤギ、いっぱい卵を産むニワトリ、草をはむサラブレッド、「卒業後は馬に関連する仕事に就きたい」と言う女子生徒、あっち行きたいよーと体を動かす子牛を上手に手綱で操る男子生徒、洗った卵をパックにつめる作業をしている女子たちにも出会いました。

今から 35 年ほど前、農業高校で教員生活をスタートさせた頃、農業に取り組む生徒たちには複雑な心境があるだろうなと思いつつも、こんなに豊かな自然の中で学ぶ農業高校には大きな可能性があるのではないかと感じていました。

かつて第二次世界大戦後の学制改革で実施された新制高等学校教育では「高校三原則」として、小学区制・総合制・男女共学という理念がありました。総合制とは、教科学習と共に農業・工業などの実業科目も全ての高校生が学ぶことで全面的な発達を期待するという考えです。しかし実態は一部の高校で農業科クラスと普通科クラスが併存したことは事

ユネスコスクールの活動として、生物資源コースでは、シカやイノシシなど野生動物被害対策についての環境教育活動や、ゴーヤ苗の配布や公共施設でのグリーンカーテン設営活動に取り組んでいます。また、食育活動として、園児のサツマイモの収穫体験や、小学生への野菜栽培指導などにも取り組んでいます。これらの活動は専門科目の授業や実習で学習した成果を発揮するチャンスでもあり、また地域に根ざした学校づくりに貢献するものでもあります。

実ですが理念の実現に向けた努力が行われたとは言い難い状況だったように思います。

ところが、ここ赤城農場で学ぶ生徒さんたちが明るく楽しげに、そして、穏やかに作業をしている姿を見ているとなにかホッとすると同時に心が温かく満たされる感じがしたのです。やはり子どもたちがさまざまな農業体験をしながら高校で学び、そして育つことに意味がある、とあらためて感じました。

「連携、と言っていたのではだめ。利根実は、はなから地域の学校なんですから」と小林勝農場長が力を込めて言いました。ここで働く先生方が、地域に根ざす若者たちを育てることの大切さをしっかりと認識して取り組んでいることに、日本の農業教育の可能性を見ることができました。取材を受け入れてくださった皆さんに心より感謝します。

《取材・撮影：瀧口典子、平井敏久、倉林順一、坂田尚之、長谷川裕介》

